

ホトトギス

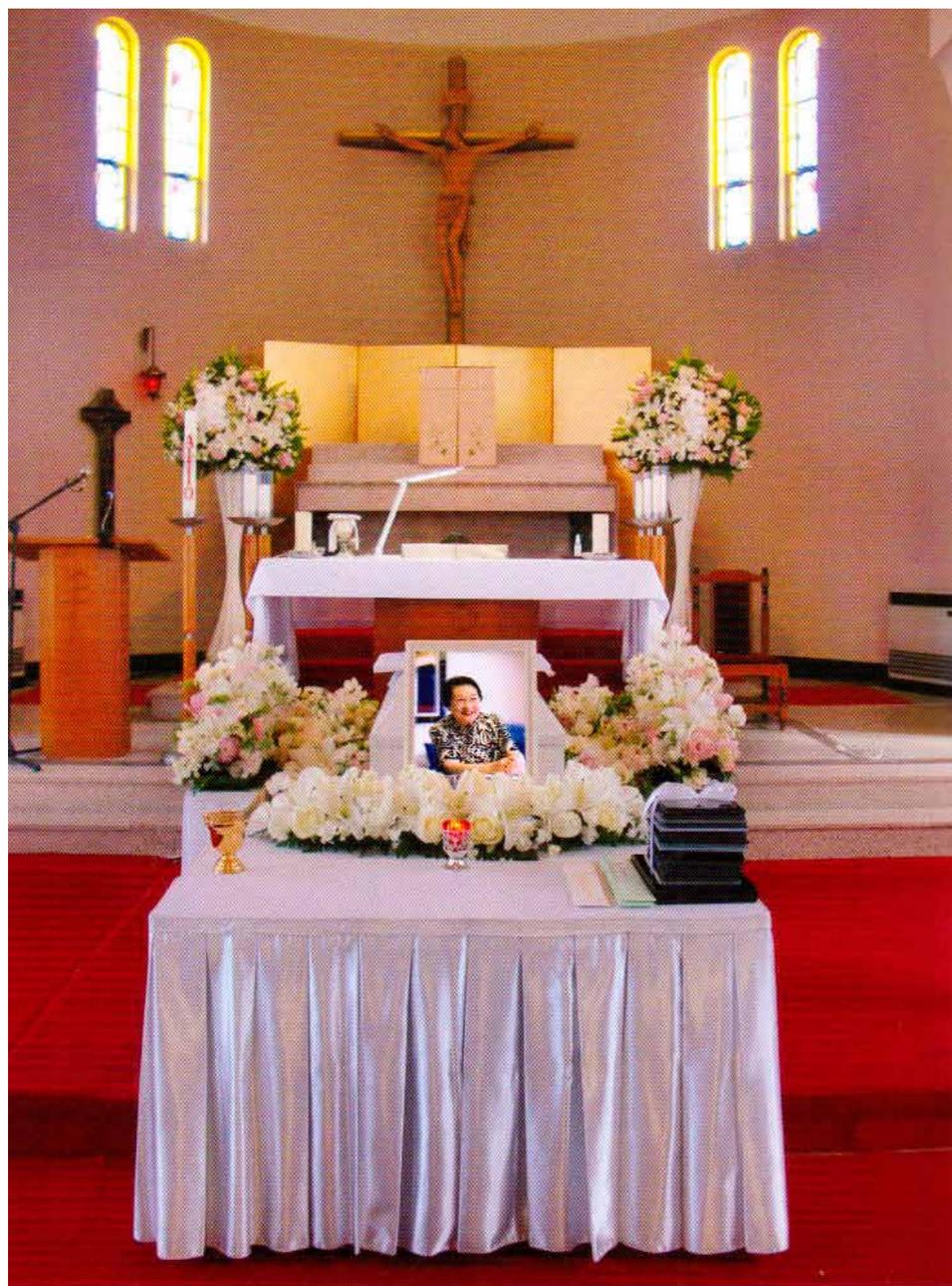
昭和二十四年八月二十九日出版  
令和四年八月一日発行  
第百二十五巻第八号

# ホトトギス

八月号

稲畑汀子追悼号





## 祭壇

令和4年3月4日

カトリック芦屋教会



# 廣太郎句帳 廣太郎

令和三年八月一日 野分会音屋例会

文月や風を感じてゐる円居

八月一日 青風会音屋例会

秋立つや恙は重く伸し掛かり

昨夜星へ伸ばせし蔓に牽牛花

終章を迎へし人に今朝の秋

立秋や疲れ切つたる君の息

八月三日 北近畿ホトギス大会出句

明易や丹波の出会夢に見て

八月四日 NHK文化センター

ビル街に病葉といふ句読点

落し文山の消息携へて

夕星を見付けしよりの夜の秋

雲の峰高層ビルを抱き込みて

八月七日 鬼貫俳句大賞

今朝の秋裾を残して富士消ゆる

八月十二日 土筆会選者吟

銀漢へ三瓶稜線肅々と

八月の便り齎す風の使者

天の川天使の吹ける喇叭劇臥かな

夕星に誘はれ芙蓉眠りゆく

天の川少女に還る媪かな

八月十三日 廣邦会

光陰を惜しみ銀漢流れゆく

八月十六日 北國文芸選者吟

天の川星の生涯見届けて

八月十九日 登高会

蓼の花先より暮れてゆく刹那

仮武多来る闇蹴散らして蹴散らして

新盆に加はる伯母の悌に

蒼天と色を分かちて蓼の花

みちのくの夜を縮めて仮武多かな

八月二十四日 若水句会選者吟

底紅の底に秘めたる善と悪

初嵐不協和音を奏でる木

一滴の涙線香花火落つ

八月二十五日 目黒学園句会

鵲の橋を渡りし君のこと

これよりは風の存問芭蕉林

日差来てより秋の蟬昂れり

夫婦星ワイングラスに閉ぢ込めて

芭蕉葉の色攫ひゆく日差かな

八月二十九日 青風会東京例会選者吟

上弦の月に誘はれ伯母逝けり

三姉妹一人欠けたる秋思かな

秋灯を消して魂呼び覚ます

新涼を纏ひ玉串捧げられ

菊溢れあふれ棺の閉ぢらるる

八月二十九日 野分会東京例会ハイブリッド句会

踊の手先に魂遊ばせて

その奥の目は饒舌に踊笠

文月や母との会話囁み合はず

# 雑詠 廣太郎 選

そつと押す館の扉や春寒し 芦屋 黒川悦子  
 師の庭のミモザ静かに黄を放つ 同  
 追憶の闇に沈丁濃く匂ふ 同  
 惜別の計り知れざる雛の黙 西宮 本郷桂子  
 来ぬと知りつつも待ちたる雛の席 同  
 慟哭の奈落へ救ひ雛の灯 同  
 ともに賞づはずでありしに初桜 神戸 田中由子  
 帰る鳥またの日待たること切に 同  
 初桜 俳 磚 増 ゆる 工 事 中 同  
 快晴や虚子生誕を祝ぐ二 月 長 岡 安 原 葉  
 御快癒を信じ春待ちぬしも夢 同  
 旅路にも師の面影や春夕 同  
 汀子師の言葉厳しくあたたかし 香 川 三 宅 久 美 子  
 汀子師の教へ心に青き踏む 同  
 汀子師に出逢へし幸や春の星 同  
 花浄土とはしづけさの中にこそ 神 戸 涌 羅 由 美  
 散る花に国を逃れし民のこと 同  
 御空より眺む吉野の花いかに 同

み吉野の花まだ固き日の訃音 龍ヶ崎 今橋真理子  
 あたたかや永久の笑顔を胸に抱く 同  
 ひとひらの湖を残して鳥帰る 同  
 掘つてまた掘つてまた掘つて蛤 大 阪 酒 井 湧 水  
 酒蒸しの蛤つつつき男酒 同  
 蛤のバター焼き添へ女酒 同  
 塔の鐘絵踏の話聞きをれば 芦 屋 小 杉 伸 一 路  
 春泥を洗ひ調教終りけり 同  
 聞こえ来る周航の歌水温む 同  
 まだ嘘をつけぬ子に来る万愚節 神 戸 藤 井 啓 子  
 燕来る街新しく人若く 同  
 掬はれて生物室の蝌蚪となる 同  
 鶯餅指にも腹のありにけり 東 京 田 丸 千 種  
 豆本がうぐひす餅の粉浴びぬ 同  
 春眠へ溶けてゆきたる愁ひかな 同  
 春星の果てまで行つてしまはれし 熊 本 岩 岡 中 正  
 一本を家宝のごとく初桜 同  
 晩年は寡黙がよろし童の玉 同  
 埋立地なりて雲雀野ありにけり 京 都 山 崎 貴 子  
 海近きこと風を帯び春の雨 同  
 小雨にも白帆のあまた春の潮 同  
 山を出て海へ海へと温む水 袋 井 湖 東 紀 子  
 囀の真下に鋏をふるひけり 同  
 蟻穴を出づる闇とは光とは 同

## 雑詠句評（七月号より）

天といふ自由ドライブのどけしや 大阪 酒井湧水

言うまでもなく、汀子師の代表句の一つへ空といふ自由鶴舞ひ止まざるはを本歌取とする甲句である。先生は運転がお好きだった。二〇一九年春、吉野の花の宿へも芦屋のご自宅から自らの運転でみえていた。お忙しい先生にとって運転は、気分転換であり唯一の趣味だったのではないだろうか。ハンドルが握れなくなつて、どんなに寂しい思いだったことか。天国がどういう所かは知らないが、酒井司教様にこう言っていただと、読み手も救われる思いがする。「のどけしや」が暖かく胸に広がつてゆく。

（眞理子）

作者は御存知の通り、汀子の葬儀を司式して下さった司教様である。今月号にその御説教を掲載させて頂いたが、心温まる素敵な御説教である。句も汀子が車の運転が好きであつた事を、季節を通して仄々と語られている。（廣太郎）

凍返る言葉入つてこぬ訃音 香川 湯川 雅

最近、改めて読んだ句文集『舞ひやまざるは』（昭和五十九年）に一枚の写真がある。「野分会の人たち」とされた中の右前列の作者、パフスリーブのワンピースの裾がしゃがみこんだ地に触れている。汀子先生の片腕として過ごした日々のある作者にとつて、その訃報は息の止まるような一瞬で、時間が停止してしまうほどの衝撃だったことだろう。そこに入つて行ける言葉はない。願わくば凍てが緩む日が来ることがあれば、溶け出す言葉を、その日々をことを聴きたいと思うのだ。（敦子）

二月の訃音といえは、やはり汀子だろうか。最愛の師を亡くすという悲しみは例えようも無いだろう。その報せは、信じられないというより、最初は理解出来ない言葉だったのだ。この時期ならではの季節が悲しく響く。（廣太郎）

主なき雛となりぬ灯を入れる 東京 田丸 千種

今迄長年雛を守り、箱から出して毎年雛を飾っていた主。その主がいない雛飾りほど淋しいものはない。雛飾りを代わりにする者も淋しさ、悲しさが募る。思い出すことばかりで、おぞろろかなかなか飾りつけも終わらないのではないだろうか。漸く飾つた雛に灯を入れるとさらに、主のいない淋しさが深まる。どこことなく雛人形のおもわも淋しく感じている作者。たんたんと事実だけを述べてはいるが、「主なき雛」と詠むことで悲しみがひしひしと伝わる深い句となつている。（むつみ）

どうしても、この句も汀子お気に入りの次郎左衛門雛を想像し

てしまうが、汀子の通夜が行われた芦屋の自宅でも、その日この  
雛の灯は点されていた。人間の一生は限られているが、雛は毎年  
その雅な姿を見せてくれるのである。(廣太郎)

北国もやうやく現れし春田かな 長岡 安原 葉

春田・春三月の季題。

さて掲句、取り入れが済んだ田畑や野山に降り積もって覆いつ  
くしていた雪も解けてやつと春田が現れた喜びが伝わってくる。  
やうやくの措辞に待ち望んでいた喜びの大きさが伝わって  
くる。(とほ歩)

北国の冬の間には雪に覆われているが、春になり雪が解けてゆ  
く頃になると大地の土が顔を出すようになる。新潟は米所ではあ  
るが、毎年雪との葛藤があるのだろう。雪の多い地方の春になっ  
た喜びが感じられる。(廣太郎)

地震のこと忘るるまじと梅真白 神戸 和田華凜

地震大国日本では、大きな地震がいつどこで起こるかかわらな  
い。二十七年前の一月十七日早朝に起こった阪神淡路大震災は、  
作者の地元にも甚大な被害をもたらした。この一句には、その時の  
思いが強く込められているのである。心が折れそうになり、しば  
らくは何も出来なかつた被災者たち。彼らを勇気づけるように開  
花した白梅は、被災地に甘い香りを広げてくれた。春まだ浅い神

戸で、やつと皆の心が一つになり復興へ向けての一步を踏み出す  
きっかけとなった。甘梅が咲く度に蘇る当時の記憶。季題に託さ  
れた作者の思いは深い。(陶句郎)

作者の地名から想像すると、阪神淡路大震災であろう。丁度梅  
の頃は復興が始まるかどうかの時だろうが、その時も梅は咲いて  
いたのであろう。作者の記憶にある、その時の梅に託して震災の  
記憶を辿っているのである。(廣太郎)

芦屋より鶴舞ひ昇る神の国 東京 河野昭彦

「鶴」(つる)ツル科の鳥の総称である。真鶴：鍋鶴等秋シベリ  
ヤから飛来する冬鳥である。

掲句は、二月二十七日に亡くなられた汀子先生への追悼句と思  
われる。先生の代表句の一つ「空といふ自由鶴舞ひやまごころは」  
を念頭におかれての句であろうと思う。先生を失った事は、ホト  
トギスを拠所とする私達にとって共通の大きな悲しみである。今  
はそれぞれ立場で先生のご冥福をお祈りする事しか出来ぬ。

筆者の俳誌「柿」主宰就任に関しては、お力添えを頂き又平成  
二十八年には「柿」創刊七周年祝賀会に松山まで足をお運び下  
さつたのであった。先生に関する思い出は尽きない。(青天子)

汀子の有名な鶴の句を思い浮べる方も多いだろう。河野美奇様  
の御夫君としてもホトトギスで活躍されておられる作者の、汀子  
を送る最高の賛辞、追悼の気持なのである。天上での美奇様との  
再会をも思っついていらつしやるだろう。(廣太郎)